

久米賞 正賞 受賞作品

細小波 (いさらなみ)

郡山市立富田中学校

三年 H・S

(平成二十四年度卒業)

一枚目の手拭い 『無念無想』

足が痛い。もうつま先が何処なのかも分からない。何とか歩く一歩から砂利と一緒に砂埃が舞う。赤土がゴロゴロとしていて、ここは、何処なんだと思う。いや、もうそんなことはどうでもいい。僕はここで何しているんだ。

新緑が輝き始める初夏。長期の連休で、姉が東京から帰って来て、久しぶりに家族が揃った夕食の時、

「私も今年五十になるし、お姉ちゃんが二十歳になる祝いに、私とお姉ちゃん富士山に登ってくるね。」

母の突然の宣言に、父と僕は、思わず持っていたコップを落としそうになった。姉とはもう決めていたらしく、驚く僕たちの顔を楽しそうに見ていた。

「いや、無理でしょう。」

思わず僕は言った。姉はともかく、母は専業主婦で、運動なんてこれっ

ほっちもしたことがない。そんな母が、日本一の富士山に登れるわけがない。僕の声なんか気にせず、母と姉ははしゃいでいた。父は、「そこらへんの、山に挑戦してみて、大丈夫となってからだぞ。」

と呆れ顔で言った。母はいつも爆弾発言をするので、父は本気にしていない所があった。母は、一生に一度は日本で一番高い富士山に登りたいと考えていたそうで、登るなら今年しかないと思姉に相談した所、一緒に登ることを快諾したということだった。

十キロやせる宣言の時のように、どうせ実現しないだろうと、高をくくっていた僕だった。しかし、登山靴を買って、近所を歩くところから始め、姉と予定を作っては、近くの山に登ってみたりして、母は本気なのだということが分かった。

「こうやって、申し込んだじゃえば逃げられないのよ。」
と、自分に言い聞かせて、富士山頂上ツアーにネットで申し込んだ時には、いよいよ本当に登るのだと思った。父は、母の真剣な決意を感じたのか、止めようとはしなかった。僕も、中体連の練習が佳境に入っていて、人のことなど構ってられない状態だった。

だから、まさか、僕まで登る羽目になるとは全く思っていなかった。

すっかり緑が庭を覆い、重苦しいほどになった頃、僕は、中学校最後の試合だった中体連で負けて、何もすることもなくなり、家に帰ると毎日ゴロゴロしていた。そんな時、

「あつ忘れてた。峻の名前でも登録していたんだった。」

と、届いた手紙を見ながら僕に聞こえるように言った。

「はっ。何言ってるの。意味わかんないし。」

そういつて飛び起きた僕のことなどお構いなしに、東京にいる姉に電話をした。

「緑。私。来た来た。富士山のツアーの紙。そう。あなたのバイトの休

「みの日で大丈夫よ。笑っちゃうの、峻も参加できるって。」

「えっ。だから何言ってるんだよ。何で俺まで登るんだよ。」

「そういって、母の方に近づく僕を、振り払うようにして、姉と話し続けた。」

後から、姉から電話が来た。

「あんたが、中体連で負けて、腑抜けになってるから、お母さん心配してたのよ。じゃあ、仕方ない、仲間に入れてやろうっていうことになったの。無理に頼んで追加してもらったんだから、文句言わないで登るのよ。あんたは、部活三年間やってたから体力は一番あるわよね。まあ足引つ張らないでね。」

六歳上の姉に、僕は頭が上がらない。

姉は小さい時から、僕の世話をしていたことを口うるさく言うので、母よりも、姉の言うことは絶対だった。

太陽が申し訳ないように庭の木々を照らす夏。結局登ることになって、今こうして僕は、この足の痛みを耐えながら、頂上を目指し、一步一步歩いている。

姉は、途中苦しくなった時すぐ飲めるようにと、水筒ではなく、リュックに入れて、ストローが伸びる最新式のグッズを得意気に持っていた。

「思ったより体力は消耗しているので、水分はこまめに取ってくださいね。」

そういうガイドさんの掛け声があつて、僕は何かにつけペットボトルのふたを開けて飲んだ。そんな時姉は、勝ち誇ったように、そのリュックについているストローから飲んでた。富士山は、六合目までは、かなり余裕で登れた。こんな簡単なものかと半ばバカにしながら歩いてた。しかし七合目になると、全く別の山のような状態になった。ゴツゴ

ツした岩が並び、手で岩をつかみながら進む。岩の他にある土は、赤褐色でさらさらした砂で、歩く度に砂埃が上がる。途中立ち止まることも、ペットボトルのキャップを回す動作もつらくなってくる。想像以上の酸素の薄さに、誰とも話したくない。

苦しい意識の中で、僕は、部活の剣道の練習を思い出した。

僕が中学校に入学した時、僕の中学校の剣道部は、剣道を教えられる先生がいなかったの、ゆるい楽な部だった。僕は、小学校五年生から知り合いに紹介され剣道を習っていた。僕が習った剣道の先生は、七十歳を超える剣道七段の笹島という先生で、無理に剣道をさせるのではなく、それぞれの子供にあった教え方で、剣道の道を教えてくれた。『面』をつける時に使う手拭いの言葉には、剣道の精神を伝えるものが多く、僕は、剣道をする時、今日ほどの気持ちかなと考えながら手拭いをつけた。僕はそういう剣道という日本の武道が好きだった。だから、迷うことなく剣道部に入ったのだが、入ってみると、本当にひどい部だった。先輩も経験者もない。いきなりある中体連は、僕たち一年生で出場して竹刀を振り、ただ毎日仲良く剣道をしていた。でも、同じ一年の仲間と、お遊びみたいな毎日、それはそれで楽しかった。

しかし、中学二年になって、僕たちの部活は一変した。春の異動で、インター杯に出場したことがある、鈴木先生という体育の若い先生がやってきたのだ。

後輩を十一人迎えた部活結成の日、整列する僕達の前に立ち、

「今日から、上を目指す剣道をする。」

体育館じゅうに鈴木先生の大きな声が響き渡った。それからの練習は、どう表現していいかわからない。今登っている富士山の七合目のように、毎日毎日、何時練習が終わるか分からない苦しみと戦った。

体育館に入ると、すぐに「胴着」「袴」に着替え、すばやく正座し、「垂」をつけ「胴」をつける。これをぐずぐずしている、校庭十周が加わるので、急いでつける。まず、この姿で、体育館を三十周走り、学校の階段を二十往復する。竹刀を持ったままうさぎ跳びをし、竹刀を振る稽古に入る。跳躍素振りを百回している時は、もう体が動かなくなる。「何とろとろしてんだ〜。」

すかさず先生の声が響く。

ようやく基本が終わると、急いで「面」と「小手」をつけ、二列に並んでお互いの「面」に向かって切り返しをはじめ。その後、互角稽古という試合のような稽古をするのだが、先生がそれに参加するので、打たれっぱなしの稽古になる。中学校二年生の剣道は、ただひたすら耐えた。

剣道は始まりと終わりに、神前に向かって一列に正座し一分間ぐらいの黙想をする。僕は、この黙想が好きだった。

笹島先生は、

「黙想は、無念無想。心を穏やかにし、邪念を払う。」

と教えてくださり、僕は心の迷いがある時、無念無想と書かれた手拭いをつけた。

「あの中学二年の時に比べれば、確かにこれぐらい平気だな。無念無想無念無想」

自分の中で、独り言を言いながら、一歩一歩登った。

二枚目の手拭い 『不動心』

僕たちが登るルートは、「吉田ルート」といい、一番初心者向のコースで、夏休みのこの時期は大渋滞となる。岩場でごつごつして登るのも

大変なのに、人がたくさんいて、人にも疲れる。母が申し込んだツアーは、八合目にある「本八合目トモエ館」という所で宿泊し、山頂を目指すコースだったので、次々と、別の宿泊所に入る登山者を尻目に、標高三千四百メートルにある宿泊所を目指した。姉が先頭を歩き、母、僕と歩いてきたので、母の比較的元気な様子に安心した。母は、結構頑張つて登っていた。午後二時に五合目を出発して、六時過ぎ、ようやく宿泊所に着いた。

「皆さん。ご苦労様でした。このトモエ館は三千四百メートルのところにあります。つまり、あと三百七十六メートルで頂上です。お渡ししたチケットで、夕食を済ませ、お休みください。明日の出発時刻は、一時です。遅れないようお願いします。」

さすが、ガイドさんだけあって、ここまできたのにまだまだ体力があるという余裕の表情だった。

中に入ろうとした時、姉の異変に気がついた。ふり返ると姉がうずくまっていた。

「緑、大丈夫。」

母が近寄り背中をさすった。ガイドさんもあわてて近寄ってきた。ガイドさんが、

「高山病という登山者がなる病気かもしれません。少し休んでだめな時は救護室に行きましょう。」

そういって、姉を支えるように、宿泊所に入った。入ってみると、三百五十人収容できる宿泊所はものすごい人でごった返していた。

「この、『トモエ館』には、今年から女性の部屋が出来てます。そこで休んでください。」

そういって、女性の部屋へ案内されている間、僕はただ立ち尽くした。

「峻、お姉ちゃんを寝かせてくるから、ちょっと待っていてね。」

母に声をかけられ、ようやく我に返った。人込みをぬけ、もう一度外へ

出た。座り込んでいる人が結構いた。僕も座って、靴を脱ぎ、足をさすりながら富士山から見える下の景色をボーッと見た。

中学三年生になって、中体連まで、部活の練習は更にきつくなった。中学一年の時九人の剣道部員は、一人減り、二人減り、中学二年の冬には、僕の学年の剣道部員は三人になっていた。

剣道は、すり足という足捌きで、剣道をする。体育館の板に、足をするように歩く。足の裏のまめはいつもつぶれて、足の皮は、指も平もむけていて、痛くてすり足が出来ないのでテーピングをする。でも、すり足を完璧にすればするほど、テーピングはすぐ取れる。だから、毎日、火であぶって粘着力の増すテーピングをその部位につけて稽古に臨んだ。冬の寒い日、体育館はますます冷え込む。そうになると、今度は、足を踏み込む度に容赦なくひび割れをした。つらかった。ほとんど部員が減る中、不思議に辞めようとは思わなかった。残った仲間と、こんな僕達についてきてくれる後輩達と、つらい中気持ちを一ツに竹刀を振るのは楽しかった。剣道は、ただ号令を掛け、竹刀を振っているだけで、心が落ち着く。

「剣道には、不動心の心が必要だ。心を動かさず、一心に剣をふる。すると見えるものが必ずある。」

激しい部活になったといううわさを、何所からか聞いてきた道場の笹島先生が、この言葉が書かれた手拭いをくださった。

「お姉ちゃん、少し落ち着いたわ。」

母が僕の側に来た。

「あの子、水分ちゃんと取っていなかったみたい。」

「えっ。最新式とかいってはりきっていたじゃない。」

「うん。でも、あれが悪かったの。飲んだ気になっていて、ぜんぜん飲

んでいなかったのよ。」

「お母さんは大丈夫。」

「私は大丈夫。ってお母さんすごくない。とうとう登って来ちゃった。途中無理かもって思ったんだけど、緑と峻に挟まれてなんだか幸せだなあって感じてたら、力がわいてきたのよ。でも、お姉ちゃんとても登れそうにないので、私もここまでにするから、峻、あなただけでも山頂にいつてらっしゃい。」

「えっ。いいよ。お母さんの夢なんだから行って来なよ。俺がお姉ちゃんみてるよ。」

「本当は、お母さんも限界かな。この後三百七十六っていうけど、この後が砂道で、結構大変なんだって。それに、七十歳で登るとなんか素敵な記念品くれるところがあるらしいの。私今度はそれを目指すことにするわ。今回お母さんはここまでで十分。ここからお姉ちゃんご来光を拜むことにする。」

僕も一緒にとも思ったが、ここまで来て山頂に登ってみたいという気持ちもあった。僕の気持ちを察してか、母が、

「ガイドさんには私から言っておくから、いつてらっしゃい。さあ夕飯食べましょう。」

と言ってくれた。

夕飯はカレー。こんな所でカレーを食べられることの方がすごい。カレー用の捨てられるエコ素材の皿で食べる。トイレも一回ごとに二百円取られる。全てが環境保護という立場で成り立っている所だった。

「お姉ちゃん、気持ち悪くて何度もトイレに行きたいのに、もったいないつて言うのよ。いいから我慢しないで言うのに必死で我慢してるの。」

「でも、トイレが意外ときれいでびっくりした。だってここ富士山の山の上だよ。何か人間ってすごいね。こんな所まで便利にしてしまう。」

僕は、しみじみそんなことを口にする、隣で食べていた五十代くらいのおじさんが、

「本当だよな。私もびっくりだよ。」

と笑った。狭いところで食べるので、隣も近い。どこか仲間意識が生まれ、僕も自然と話した。

「とあ起きて。」

夕食の時隣になったおじさんに起してもらった。

「眠いね。」

というおじさんの言葉に、目をこすりながらうなずいた。僕は、ボーっとする中、とりあえず身支度をし、おじさんについていくように外に出た。母が心配そうに外に出てきた。

「すみません。夕べも話しましたが、娘の具合が悪くて。息子を頼んでしまいました。本当に大丈夫でしょうか。」

そうおじさんに言うと、

「大丈夫ですよ。私の方が助けてもらうかもしれない。」

そう僕の方をみながら笑って言った。

ガイドさんは三百七十六メートルと簡単に言ったが、この三百七十六メートルがきつかった。平地で走ったら、何でもない距離なのに、この頂上までの道は全く別世界だった。昨日までの岩場の登山道とは打って変わって砂利の滑りやすい道で、頂上はすぐそこなのにまっすぐに登ることができない。「金剛杖」という杖で、しっかりと押さえ、次の一歩を出す。まだ真つ暗なのに、登る人がたくさんいて、進む道が照らされてあった。道が見えるのに前に進まない。空気はますます薄く限界かもと思えてきた。

「加藤、おまえはこれが限界か。」

互角稽古で、足が動かなくなった時、鈴木先生の声が飛んだ。

「はい。限界です。」

思わずそう答えた僕に、

「バカ野郎。限界は自分で決めるんじゃない。限界を決めてしまったら、そこで終わってしまうんだぞ。お前たちは絶対強くなれるんだ。頑張れ。おまえならできる。」

初めは悔しくて涙が出た。しかし、そう言って、構える先生の目が潤んでいることに気がついた。強い口調なのに、先生の面の奥の目が優しく感じた。さつきとは別の涙が溢れ、体が全く動かないのに、心の中に何か湧き出る力を感じた。

「くそー。とりゃー。」

僕は涙を拭うこともできず、先生に飛びかかった。

あの時僕は、鈴木先生が僕達のために本当に強くさせようとしているのだと感じた。あの日から、僕も真剣に剣道を頑張ってみようと心から思った。

そうだ、「不動心」。こんな時こそ心を動かさず、ひたすら前に進もう。

そう思うと、僕の足が前に動きだした。

三枚目の手拭い 『克己心』

ようやく頂上を示す鳥居に近づいた。

「もうすぐですね。」

僕が言うと、おじさんが、

「あの鳥居をくぐっても、もう少し先に行かないと頂上はないんだよ。」

「えー。そうなんですか。」

「そうがっかりするな。どつちにしてももうすぐだよ。」

鳥居をくぐったところで、ガイドさんが声をかけた。

「もうすぐ四時になります。ご来光の時間になりますので、皆さん私に

ついでてください。皆さん、ラッキーですよ。今日はきれいなご来光が見られそうです。」

暗がりの中、とにかくガイドさんの言われるままに進み、並んでその時をじっと待った。日本一の山に、これだけの人がいるんだと思うほど、人、人、人で混みあっていた。それでも、ただじっと太陽を待つ姿は、不思議な連帯感があった。

少しづつ白くなってきた世界の中で、その時が来るのをじっと待った。

「わー」

一斉に声が湧いた。ご来光だ。黒から白、そしてオレンジ、世界が色を少しづつ取り戻す今、僕は日本一の山の上で、この瞬間を感じている。

「すごい。」

思わず声が出た。

光を取り戻すと、世界は早く動き出す。人も動き出し、六時に開く郵便局の前で、証明書を発行してもらうため並ぶ人も出てきた。

おじさんが、

「今のうちに、三千七百七十六メートルの地点を目指そうか。」

そう声をかけてくれたので、おじさんについて行くように、富士山頂郵便局、浅間大社奥宮の社務所を通り、剣ヶ峰を目指して歩いた。ちよつと足場の悪い道だけど、毎年たくさんの方がその道を通るため、歩きやすい一本道が出来ていた。

「ほら、あそこだよ。」

そういうおじさんの指の先に、『日本最高峰富士山剣ヶ峰』という石碑があった。

「峻君、ここが三千七百七十六メートルの地点だよ。」

おじさんの声も少し興奮気味だった。僕はその石碑に触り、おじさんと写真を撮りあい、また郵便局の方に向かった。歩きながら、これが日本一の山で、僕はそこに登ったのだと思うのだが、何だか実感がわかな

かった。郵便局で『登山証明書』を発行してもらった時も、周りの人たちの大興奮は感じたが、どこか他人事だった。

僕達の剣道部は、春の中体連地区大会で優勝した。ダメダメ部がっらい練習に耐え優勝なんて絵にかいたような話で、周囲の興奮と裏腹にこんなものなのかと感じた。剣道の団体戦は、五人で戦う。先鋒、次鋒、中堅、副将、大将。それぞれが戦い、勝数が多い方が勝つことになる。サッカーやバスケットとは異なり、基本的に、個人の戦いで、自分次第で、チームの勝敗が決まってしまうため、対戦相手と剣先を揃え、試合開始の「はじめ」の号令を待つ瞬間は、緊張で震える。

「剣道は、『克己心。』戦う時は一人なので、相手に勝つことより、己に勝つことが大切なんだ。勝ちたい勝ちたいと思う剣道は、剣先がぶれてしまう。自分を振り返り、己に勝つ気持ちで気合いを出せ。」

初めて市の大会で試合をした、小学校六年生の時、笹島先生が教えてくださった。僕は、その言葉を思い出し、その言葉が書かれてある手拭いを使って試合に臨むのだが、そうはいってもつい勝ちたい気持ちの方が強く、竹刀を無駄に振り、よく鈴木先生にしかられた。自分には、決定打もないので、団体戦は引き分けになるよう、三分間全力で戦った。あんなに練習した僕達が負けるわけではないという気持ちもどこかあった。だから、当然と思っていて、県大会も行くのだと信じていたが、県中大会であっけなく負け、僕の部活動は簡単に終わってしまった。

終わったなら、何をして良いのか分からない。始めは、あの練習が無くなくなったことが信じられなくて、家に帰ってもずる休みしている気分になった。三日目は、剣道が気になって、こっそり覗いてみたりしたが、そこにはもう自分の場所は無かった。

受験生なので勉強するのが当然で、実際すぐに中間テストが始まるの

に、勉強する気にもなれなかった。あんなにつらい練習の後の方が、集中して勉強ができた。有り余る時間の中で、ふわふわ浮いている感じだった。

このままではいけない。僕自身だつて思っていた。だから、母の計画に参加してみることにした。でも、今頂上に登って、ご来光も見たのに、全く変化を感じない。注がれる光の中で、僕は変わるんだと思っていたのに、何も変わらない僕がいる。こんなものか。僕の中でこの気持ちがいっぱい湧いた。

僕は、おじさんに礼を言い、ガイドさんと話して、母の所に先に行かせてもらうことにした。富士山の下山は、行きのコースとは全く違うが、母の宿泊所には合流できることになっている。降りる人についていけば、自然とそこにつけるので、ガイドさんも許してくれた。山頂に登れなかったのは、母達だけではないので、もともと合流することになっている。富士登山には、これも当然のことらしいので、僕だけ一足早く、母の所に下山した。

しかし、この下山が僕の想像を超えた。登る時に滑った赤い土砂は、帰りにはもつとひどい足場になっている。かかとで踏み込んでもズブッと引きずられる。「金剛杖」を支えに踏ん張るのだが、それでも滑って行く。周りの人たちも滑って転ぶ人が多い。下山はすぐだと言われたが、神経の使い方は半端ではない。忘れていた足の皮の痛みさえも感じられるほど足への負担は大きい。おまけにあんなに天気だったのに、突然霧が出てきたと思ったら、一変に視界が悪くなった。足場は最悪なのに、前の人さえも見えない。人の声はものすごくするのに、一人のよくな感じになり、思わず「克己心」と心に唱えた。そうだこんな時こそ、自分を信じ前に進むんだ。一歩でも前に。

視界が悪い中、人の声で、八合目に戻ってきたことが分かった。ガイ

ドさんに言われた吉田ルートを示す黄色の標識に従って、登山ルートとの合流地点に向かった。あった、トモエ館だ。夕べの人たちは、ほとんど山頂にいるので、昨日よりは少ない人数の人が休んでいた。母達もそこにいた。

「お母さん。」

その声をかけると、驚いたように母と姉は振り返った。

「どうしたの、早いじゃない。何かあったの。具合がわるいの。」

そう言って、母が近寄ってくる。姉は少し楽になったのか笑顔でこっちを見ている。

「大丈夫。お願いして先に降りてきたんだ。」

と、僕が答える間もなく、

「見た。ご来光最高だったね。」

と、姉が笑う。

「お母さんなんか泣いちゃって、恥ずかしかったんだから。あんたも泣いちゃった？一人でこわいーって。」

「バカ言うなよ。ほら、写真。」

そう言って笑っている写真を見せた。

「お父さんにもメールしたのよ。今度はお父さんも連れてこよう。」
迷惑そうな父の顔が浮かんだ。

四枚目の手拭い 『瞬間善処』

ガイドさんが来るまで少し仮眠をとった。母と姉をみて安心したのもある。やっぱり、この二人に囲まれるのは気持ちが良い。

「あんた、すごいいいきだったわよ。」

ガイドさんが来て、いよいよ下山するという頃、姉に起こされた。

「そっちはどうなんだよ。」

「大丈夫。高山病には頭痛薬が効くって聞いていたから、持ってきていたの。飲んだら楽になった。」

「準備良すぎて登れないなんて最悪だな。」

と言いつ終る僕の口よりも早く、姉のパンチがきた。

「でも、マジで、下山は足に来るから。何か登るより大変だった。お母さんも、お姉ちゃんもゆつくり行こう。」

そういう僕を、

「峻、大人になって。山は人を変えるって本当なのね。」

と涙ぐむ母に、だから、僕は何も変わっていないんだと言いたくなかったが、黙って下山の支度をした。

「何この道。なんでこんな所下山出来るの。登山のことはいろいろ書いてあったけど、下山がひどいなんて聞いていない。」

そう喚く姉の言葉を聞いたガイドさんが、

「そうなんです。富士山は下山が大変なのに登ることしか考えていない方が多くて困るんです。先日も、スニーカーで軽く登った人が、下山で足の皮がめくれて途中降りられなくなったりしたんですよ。皆さんのようにちゃんと登山靴をはいてきてくだされば大丈夫なんですけどね。」

「姉は、準備だけだったら、このツアー参加者一番です。」

と僕が答えると、ガイドさんは大声で笑った。

「ほら、霧も出てきました。ここら辺ではこの霧を『細小波（いさらなみ）』と呼びます。深く広がる霧ですが、この波が消えた後は、嘘のよう澄み渡る空を見ることが出来ます。これから視界が少し悪くなるので気をつけてください。」

間もなく、ガイドさんの言うように、視界が悪くなった。しかし数分後、波が引くように、スーッと霧の海が消え、本当にどこまでも澄み渡る世界が広がった。視界が広がると想像以上の世界が見える。下山の道も下の方まで見渡せて、延々と続くつづら折りの道がはつきりと見え、僕が

これから進む道が良く見えた。

「瞬間善処」。剣道を卒団する君たちに、この言葉を贈る。」

道場の卒団式の日、笹島先生がおっしゃった。

「私が試合の時いつも思う言葉だ。遠い先の未来は何が起るか分からない。しかし、その瞬間、その瞬間、最善を尽くせば、きっと道は開けると私は信じる。これから君たちが進む道はそれぞれの道だろう。しかし、剣道の教えはどんな時にも役に立つ。」

中体連を前にして、毎日鈴木先生のつらい剣道をしていたので、春の卒団の時、笹島先生のこの言葉が耳に入らなかった。あの時の僕にとって、剣道はつらい「忍耐」というものだけだった。

「獅子岩」という岩を曲がり、そこから横への一本道を進むとようやく最初の地点に戻る。もうすぐ終わる。足の指先の痛みを感じながら、変わらない自分でも良いかと思えてきた。今の僕はきつと細小波の中にいる。この霧の中でどうして良いか、何をすべきか見えずにいる。剣道が終わって、何をしていいかもわからない。そんな自分がどこか恥ずかしかつた。今回富士山を登って、僕の中に剣道が消えないことが分かった。練習の時あんなにつらくて、剣道から解放されることをずっと夢見ていたのに、終わってしまったと、考えるのは剣道のことばかりだった。でもそれも自分なんだ。部活でその時その時を乗り越えたように、今この時を頑張れば、きつと僕の道は開ける。細小波がさつと消えるように。僕は僕らしく、今この時を一生懸命生きればいいんだ。「瞬間善処」。僕の道を開くために僕は今を頑張ろう。もうすぐゴール。でもそれは僕の新しい一步の気がする。

《作品の意図》

中学生の今は視界があやふやな霧の世界の細小波の中にいる。

富士登山と剣道部での体験を剣道で使う手拭いの言葉を使うことにより表現することで、中学生の自分だからこそ描ける視点で今を伝えたいかった。

《作品の寸評》

母と姉と一緒に富士登山の話に剣道部の部活動の話を織り込みながら、夢中になって取り組んできた部活動が終わり、何をすべきか、どうしたらよいのか見えずにいる主人公「峻」が、必ず霧が晴れて視界が広がることを信じて生きようと希望を抱く様子を描いて見事である。

剣道で学んだ「無念無想」「不動心」「克己心」「瞬間善処」というそれぞれの言葉が持つ意味を象徴的に生かす作品構成もよく、体験や取材に基づいたしっかりした文章で描く剣道部の部活動の様子や富士登山の様子は真に迫り読む者を引き付ける。また、家族との温かな交流も効果的に描きこまれるなど完成度の高い作品である。

さらに、「頂上までの道は全く別世界だった」「道が見えるのに足が前に進まない」「ただじっと太陽を待つ姿には、不思議な連帯感があった」「光を取り戻すと、世界は早く動き出す」「注がれる光の中で、僕は変わるんだと思っていたのに、何も変わらない僕がいる」「視界が広がると想像以上の世界が見える」などの表現は、体験を通して感じとったものであるが、印象的で、作者の資質の高さを感じる。